

2023年7月16日（聖霊降臨後第7主日、特定10、A年）

牧師メッセージ

「み言葉の種」

（マタイによる福音書13:1-0, 18-23）

司祭ヨセフ太田信三

コロナ禍の教会を思い返すと、礼拝休止期間中のあの寂しかった教会でも、お庭はきちんと季節ごとに実りが与えられていました。冬には枯れてしまったように見えた木も、今は生い茂っている。一見何も植えられていないようなところから、春になったら芽が出て花が咲く。それと同じように、神の御力はわたしたちには一見して分からなくとも、常にわたしたち一人ひとりに注がれています。枯れてしまったように見える木に栄養が絶えず送られ、実りをもたらすように、今、枯れてしまったように見える人にも、神は必ず実りのための養分を送り続けてくださっているのです。

パレスチナではあらゆるところに種を蒔いて、その後で鋤を入れて土地を耕しました。それゆえ、風に飛ばされてしまったり、踏みつけられたりして、無駄になる種も多く、収穫率も高くありません。けれども、農夫は豊作を信じて種を蒔き続けます。その農夫のように、主なる神は、わたしたちがどのような環境にしようとも、蒔かれた種が実ることを信じ、そこを耕し、開き、手入れをしてくださいます。そして必ずやわたしたち一人ひとりを開き、それぞれに見合った、ふさわしい実りをもたらしてくださいます。

蒔かれた種子には力があります。コロナ禍でもその営みが変わらずにあったように、種子（＝み言葉）そのものに、実を結ぶ力が込められているのです。だからこそ、わたしたちにできることといえば、み言葉の力を信じ、そこに込められた神の思いから、愛から離れることがないように、日々「わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。」と願い、祈り続けることです。そこに神の助けがあるから、わたしたちは、石ころや茨のような、様々な誘惑の中にあっても芽を伸ばすことができます。神がわたしたちの手をしっかりと握ってくださっているから、神の御腕にしがみつき、その手に委ねて生きることで、自然と木が生い茂るように、わたしたちにも実りがもたらされます。

わたしたちは種を受けると同時に、蒔くことも委ねられています。

「わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げわたしが与えた使命を必ず果たす。」この力強い神の宣言を覚えていたいと思います。主イエスがこの言葉に励まされ、信じて種を蒔き続けたように、わたしたちもまたこの言葉を信じ、わたしたち自身も実りを与えられつつ、種を蒔くために出かけてまいりましょう。